

# 小学校における災害後教育の実施に関する考察

— 平成30年西日本豪雨被災地域の事例に焦点を当てて —

## Implementation of Post-Disaster Education at Elementary Schools Analysis

— Focusing on the Case of an Elementary School in the Area Affected by the  
2018 Torrential Rain Disaster in Western Japan —

上之園 公 子・安 倍 正 香<sup>1</sup>

UENOSONO Kimiko and ABE Masaka

キーワード：総合的な学習の時間の指導法・復興教育・災害安全教育

### はじめに

災害後教育プログラムは、1995（平成7）年の阪神淡路大震災直後、神戸市教育委員会、兵庫県教育委員会において策定されており、さらに、2011（平成23）年東日本大震災の発生以降、全国的に災害安全教育プログラムの作成、見直しが実施されている。その中には、災害についての知識や対応、災害の継承等の災害前教育プログラムに加えて、災害後教育プログラムを策定している自治体も見られる。特に東日本大震災で被災した地域の自治体を中心に、災害後教育においては、防災（二次災害防止）教育とともに被災地域の復興や自然災害を乗り越える子どもを育てる教育が作成されている。例えば同震災直後に岩手県教育委員会による『いわての復興教育プログラム』は2012（平成24）年初版から、2019（平成31）年第3版<sup>2</sup>へと改訂され、継続実施されている。

本研究は、自然災害被災地域の小学校における災害後教育の実践を調査し、その成果と課題を整理するものである。この研究を踏まえて、今後の小学校における災害後教育のあり方の在り方を見出していきたい。

## I 本研究の目的と意義

### I-1 研究の目的と方法

本研究は、2018（平成30）年西日本豪雨災害の被災地域の小学校における災害後教育としての単元開発を行い、その成果と課題を整理し、今後の災害後教育の在り方を探ることを目的とする。

本研究では、被災地の小学校を研究協力校として依頼し、災害後教育を意図した一単元を開発、実施し、各段階における児童の反応を調査する。また、児童一人一人の意識の変容については、授業実施前後に、質問紙及び個別の聞き取り調査を実施する。これらの調査結果を分析し、災害後教育実施における成果と課題を考察する。

### I-2 研究の意義

すでに、東日本大震災の被災地域等においては、復興教育等の震災後教育が進められているが、全国的にプログラムが拡大しているとは言えない。本研究では災害前教育プログラムのみを策定し

<sup>1</sup> 広島県安芸郡坂町立小屋浦小学校

<sup>2</sup> 岩手県教育委員会『「いわての教育復興」プログラム（第3版）』岩手県教育委員会事務局学校調整課産業・復興教育担当、2019年。

ていた小学校を対象とし、自然災害被災後に初めて災害後教育プログラムの作成に着手する事例を取り上げる。本研究は、その実施、修正を行う過程における一単元を取り上げ調査したものとなる。

自然災害の被災地域は、被害状況も地域の実態も異なり、共通点を見出すことは困難である。しかし、東日本大震災後の東北地方での復興教育プログラムは、他の自然災害被災地域の復興教育の参考となっている。本研究における被災地域の教員による災害後教育の実践の調査と考察の積み重ねが他地域での災害後教育における授業づくりの手がかりになることを願っている。

## II 小学校における災害後教育の実施

本研究では、自然災害被災地域の小学校において災害後教育として開発した一単元を取り上げ、児童の反応を調査し、分析する。

### II-1 対象校

対象校は、2018（平成30）年7月の西日本豪雨災害被災地域の小学校に協力を依頼した。<sup>3</sup>

### II-2 対象校の被災状況

2018（平成30）年7月6日に発生した西日本豪雨災害における対象校の地区は、死者・行方不明者16名、家屋の被災状況は、総戸数796件のうち658件という被害となった。対象校では、57名の在籍児童の内、9割が被災し、本研究実施時の2019（平成元）年12月時点においても1名が仮設住宅で生活している。災害時には学校敷地内に瓦礫や泥が流入するとともに、校舎は避難所、校庭は災害ゴミの集積場の状態で被災後54日目の2018（平成30）年8月28日に学校再開となった。

### II-3 対象校の災害後教育

#### (1) 2018（平成30）年度における災害後教育

##### ① 災害直後（学校再開前の休校中）の教職員の取り組み

休校中には教職員全員で授業及び実施時期の検討が行われた。児童の実態や心情に配慮して自然災害に関することに触れないように配慮した。例えば、道徳科や理科における災害を連想させる教材の時期の検討等である。二次災害等の防災教育については、日々の生活の中での登下校の安全指導や避難指示の際の避難場所などの確認程度に留め、自然災害には直接触れないこととした。

##### ② 学校再開後の教職員の取り組み

学校再開後、児童に対しては以前と同様の接し方に努めながらも取り組みの中心は安全確保と環境整備を中心とした。特に災害後の危険箇所を回避するための登下校の指導と児童の遊ぶ空間の確保を行った。学校再開後も児童の遊び場でもあった運動場は災害ゴミ一時保管場所、体育館等は避難場所となっていた。そこで、空きスペースに卓球台を設置する等の工夫を行った。年度末に教職員・児童・家庭・地域の意見を集約し総括した。以下はその概要である。

教職員：災害を目の前にして何もできなかったことによるこれまでの防災教育や取り組みに対する自信の喪失。今までに行っていた防災教育の見直しの必要性の実感。

児童：地域や高齢者の方々とのつながりや郷土愛への関心。地域を笑顔にしたいという思い。

地域・保護者：児童の確かな学力、豊かな人間性、健やかな身体育成の意識

安心・安全な学校生活への関心。豪雨災害の伝承者・復興の担い手としての児童への期待。

#### (2) 2019（平成31）年度における災害後教育

年度末の総括に基づき、当時の校長を中心に防災教育の見直しが行われた。「児童が高齢者等の地域の人々と交流することを通して人々のK地区に対する想いや願いを知り、K地区を笑顔にす

<sup>3</sup> 本研究の対象校は広島県安芸郡坂町立小屋浦小学校であり、調査において全面的に協力を頂いた。授業実践は、対象校において安倍が行った。本文では小学校及び地区名の小屋浦をKとした。

る活動や日々頑張る姿を見せることによって、児童自らが復興の担い手になってほしい」<sup>4</sup>という願いをもとに、岩手県で実施されている『いわての復興教育プログラム』を参考にすることとなった。

対象校では、復興教育における目的を設定し、学校教育目標とのつながりを明確にした全体計画が策定された。なお、この計画では「復興共育」という文字を使用し、学校と地域が協力し、K地区全体で共に復興するという思いを示している。K小学校「復興共育」の目的は次の通りである。

- ・ふるさとK地区を愛し、将来、K地区の復興・発展を支えようとする人材の育成
- ・「仲間や地域の人々とのつながりを大切にする」指導内容の工夫
- ・地場づくり（郷土の自然、伝統行事、郷土芸能、人のつながり、安全な町、地域づくり）

全体計画をもとに対象校では「いきぬく」「かかわる つなぐ」「そなえる」の3つの視点をもとに各学年で取り組むこととした。また、(1) 学校で歴史的にシンボルとしてきた大樹「くすのき」を学校・家庭・地域の団結を図るシンボルとする。(2) 復興共育の全体計画21項目の実施を可視化する。というねらいのもと、「復興くすのき」を発信することとした。

### Ⅲ 災害後教育における授業の概要

#### Ⅲ-1 授業の概要

対象校において実施した単元の概要を以下に示す。

- (1) 対象児童 第5学年（男子3名、女子6名）
- (2) 実施期間 2019年7月～2019年2月
- (3) 単元名 K地区に笑顔を広げよう～K地区の人々の想いを受けて～
- (4) 本単元で育成する資質・能力 課題設定能力（見通す力）主体性・積極性 郷土愛

#### Ⅲ-2 単元実施前の児童の実態

対象学級の児童は、2018（平成30）年の西日本豪雨災害直後に、総合的な学習の時間の単元「K地区に花いっぱい咲かせよう」において復旧・復興の一端を担う経験をしている。

#### Ⅲ-3 単元の概要

児童が課題意識を持ち、復興に向けた活動に繋ぐために次の3点に基づいて単元構成を行う。

なお、児童の反応や記述等の分析もこの視点に基づいて行う。

- ①多様な立場の人々と直接関わる活動を通して、課題発見、課題設定ができるようにする。
- ②課題解決のプロセスに地域の人々が参画することにより、協働的な課題解決の良さを実感できるようにする。
- ③地域の人々と繰り返し関わる活動を通して自分達がふるさとの復興・発展の一端を担っているという自己有用感を持つことができるようにする。

#### 単元目標

K地区の人々との交流活動を通して、課題解決に向けて取り組みを進め、地域の一員として、課題もち、自分たちも地区の未来を創っていく担い手であることに気付くことができる。

#### 評価の観点

評価の観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
評価規準	<ul style="list-style-type: none"> <li>・インタビューなどによる情報収集を相手に応じた方法で実施している。</li> <li>・集めた情報を課題解決に向けて分析している。</li> <li>・同じ被災地域の人々でも年齢や立場で思いや願いが異なることに気付いている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・情報収集において、対象者に応じて質問の内容や方法を決めている。</li> <li>・復興、発展のために自分たちでできることを見出している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・K地区の未来のために自分ができることを友だちと協働して課題解決に取り組もうとしている。</li> <li>・K地区の人々の立場や気持ちを理解し、その思いや願いを実現するための自分の役割を果たそうとしている。</li> <li>・K地区の文化伝承・災害伝承・地域への貢献等についてこれからの自分の役割意識している。</li> </ul>

<sup>4</sup> 前校長の吉岡哲哉氏によるものであり、対象校の「復興共育」の基本的な考え方となっている。

### Ⅲ-4 単元の指導内容

探究の過程	時間	主な学習内容 ☆自他を意識させるための 指導の工夫	評価規準及び評価方法
導入 (振り返り) 情報収集 整理・分析	6時間	①野菜作りや「かふえ・つながり」や移動スーパーにきた方々にインタビューする。 ☆災害後の生活の変化に関する取材(インタビュー)をする。	・災害後のK地区の人々の暮らしの変化を知る。(ワークシートの記述・振り返り) ・インタビューやアンケートなどの情報収集の仕方を知る。(振り返り)
課題の設定	2時間	①これまでの学習を振り返り、課題をもつ。 「GO!5!スマイル」プロジェクト ～K地区の人々の想いを知ろう～ ②学習の見通しを持ち、計画を立てる ・より多くの地域の方と知り合おう。	・より多くの地域の人々と関わりをもつという課題に向けて、解決方法や手順を考え、見通しをもち、自分たちで計画を立てる。 (発言・ワークシート)
情報収集 整理・分析	10時間	①より多くの地域の方と交流する。 ・「かふえ・つながり」に集う方 ・仮設住宅に暮らしている方 ・ゲートボールなどの活動をされている方 ・近所の方・秋祭りに携わる方 ☆より多くの方々との交流をもち、現在の思いを取材する。(インタビュー実施) ②インタビューの内容を集計し、交流した方の思いについて整理する	・相手の立場や思い・考えを理解しようとしている。(態度) ・友だちと共同して計画を進めている。(態度) ・集めた情報を整理したり分析したりする方法を理解する。 (振り返りシート) ・災害後のK地区の人々の暮らしの様子や思いについて知る。 (発言・振り返りシート)
創造・表現 情報収集	5時間	「GO!5!スマイル」プロジェクト ～K地区に笑顔を広げよう～ ①回答内容の集計結果と自分たちの考えを持つ。 ②GTに自分たちの考えを提案する準備をする。 ③GTに、自分たちの考えを提案し、話し合う。 ☆GTに自分たちの考えをつたえ、意見交流をする。 ④復興に向けたイベントの計画を立てる。 ⑤「GO!5!Smile サロン」に向けて準備を行う。 ・交流計画、分担 ・案内や手紙の作成 ・正式なイベント名の決定	・相手の立場に立った取組になるよう、課題解決に向け、自分の考えをもっている。 (表現・振り返りシート) ・友だちと協働して提案の準備をしている。 (態度・振り返りシート) ・K地区の伝統・災害継承等、地域に貢献することを意識し、活動に参画している。 (表現・態度) ・友だちと協働して提案の準備をしている。 (態度・振り返りシート)
まとめ・表現 振り返り 課題の設定	3時間	①これまで学習したことを生かし、「GO!5!Smile サロン」を実施する。	・目的に応じて、工夫し、自分の考えを明確に表現している。 (表現・態度) ・計画を進んで実践し、地域の人々に積極的に働きかけている。 (態度)
振り返り	1時間	①単元の振り返り、新たな課題を持ち、もっとやってみようことを考え、話し合う。	・学習の仕方や進め方を振り返り今後の学習や生活に積極的に生かそうとしている。 (発言・振り返りシート)

### Ⅲ-5 実施結果

#### Ⅲ-5-1 単元の各段階における児童の反応及び記述内容

単元では5つの段階を(1)地域の人々の実態や思いの情報収集、(2)情報の整理・分析・新たな課題発見、(3)自分たちにできそうな企画の立案、(4)企画に対する地域の人々との意見交流、企画の修正、(5)自分たちで考えたイベントの企画の実施とした。単元の実際を5つの段階毎に示す。

##### (1) 地域の人々の実態や思いの情報収集

K地区の人々の現状や実際に求めていることを把握するために、次の情報収集を行った。

##### ① 地域の野菜作り名人を訪ね、インタビューを行う。

学級園に植えた自分たちの野菜の生育状態が悪いことから、野菜作りのコツを尋ねることにした。自分たちの作る野菜とは明らかに異なっている立派な野菜を見て、土作りの違いを原因と予想し、野菜農家の方(野菜作り名人)に取材した。以下は、児童が収集した農家の方の発言の概要である。農家の方：何年も一生懸命作ってきた肥えた土が、土砂で全部流されてしまうたんよ。

今、根気強く土作りを続け、野菜が元気になることを諦めないでいる。(以下略)

### 〈事後の児童の記述〉

おじいさんに、学校の畑の野菜の苗に元気がないことを相談すると、「土じゃろうの。元肥をちゃんとやらんと。そして、暑い日も草をちゃんと取ってあげんと。わしらは、子供を育てるように、大事に野菜を育てよるんよ。」と教えてくれました。(中略) 私たちがK小学校の畑をすることで、畑を失った方たちに、笑顔が戻ってくることになるのではと、みんなで話しました。(以下略)

#### ② 移動スーパーで買い物をする高齢者の方に尋ねる。

移動スーパー(とくしまる)は、土砂災害でK地区に唯一あったスーパーマーケットがなくなった代替として食料品等を自動車で巡回するものである。児童の家庭の多くは、保護者が自家用車を利用して遠方のスーパーマーケット等に出かけることが可能である。しかし、K地区の高齢者の方たちは、ほぼ毎日、生鮮食品と日用雑貨をこの移動スーパーで買い求めていた。

児童は「毎回、とくしまるで買い物をするのですか。」「どんなものを買われているのですか。」という聞き取り調査を行った。その結果、次の2点を把握した。

ア 地域の高齢者の方たちは、電車やバスに乗って大きなスーパーマーケットにたくさんの物を買っていくより、毎日、必要な生鮮食品を買い求めている。

イ 買い物に来る方たち同士で、互いに顔を見て話すのが楽しみのようだ。

調査結果を児童は新聞「K地区のお買い物NOW」にまとめた。その内容として、災害によりスーパーがなくなり不便ではあるが、移動スーパーは、食料品を買うためだけでなく、そこに集う地域住民の交流の場であり、元気であるかどうかを確認する場にもなっている。つまり人々の心のよりどころのひとつになっていると記述している。

#### ③ 高齢者のつながりの場での聞き取りを行う。

K地区の「かふえ・つながり」は、被災後の人々の繋がり場である。(毎月1回開催され、約30人が集まる。)地域のリーダーが発起人となり、地域に暮らす高齢者の方たちの心の拠り所として創ったものである。児童は「かふえ・つながり」に初めて参加したが、高齢者の方々から歓迎され、声かけをされた。次はその一部である。

参加者：〇〇さんところのお孫さんよね。〇〇さんには野菜の作り方を教えてもらっとるのよ。

この度の土砂で家や畑が大変な被害を受けて大変だったのよね。

災害の時は声をかけてもらってね、このセンターに避難したのよ。

また、災害当時の生々しい状況を語る方も多く、自分自身の住居地以外での被害の様子を初めて知る体験となった児童も見られた。

「かふえ・つながり」の参加後、教室で参加の意義と目的の話し合いを行った。

児童：地域の方たちが、自分たちに災害時のことを一生懸命に語ってくれるということは、自分たちは話を聞く役割があるのではないか。

児童：自分たちからも、地域の方にいろいろ尋ねてみよう。

その結果、2度目の参加を企画したが、自分たちが「ふるさと」の曲に合わせた手話を披露すること、きちんとした聞き取り項目を準備することとした。児童が考えた聞き取り項目は次の通りである。「(災害によって)できなくなったこと、不便になったことは何ですか。」「お買い物は、どのようにされていますか。」「今、楽しみなことは何ですか。」「K地区がこれからどうなってほしいですか。」この項目は、各自が自分の近所の方にも実施し、最終的に約60名の回答を得た。

#### ④ 仮設住宅に暮らす方々に聞き取りを行う。

5月に仮設住宅の児童が復興運動会の案内を近隣の方々に配布したところ、予想以上の反響(お礼の手紙や電話)があったことから、学習発表会の案内を仮設住宅の方に届けたいという希望を児

童たちが申し出た。案内の配付は「小学校のみんなは頑張っていますよ。」と知らせることができるとのことであった。仮設住宅を訪ね、学習発表会の案内を手渡し、約16人の方に会うことができた。仮設住宅に暮らす方々は、児童達が訪ねてくれたことを喜びながら、一方で、K地区に帰るべきかとても悩んで迷っておられることも話してくださった。児童の聞き取りの会話の一部である。

児童：これから、K地区はどうなってほしいですか。

仮設住宅の方：君の夢は何？何になりたい？これから、君たちは中学・高校・大学と勉強をしていくだろう。そして、高校や大学などはK地区から離れて暮らすことにもなるだろう。だけど、どんな仕事についても、学んだことをこのふるさとのために生かしておくれよ。K地区を頼んだよ。

## (2) 情報の整理・分析・新たな課題発見

### ① 収集した情報の整理・分析

児童の聞き取り活動によって、K地区で暮らしている方58人、仮設住宅で暮らしている方16人、合計72人の方から回答を得ることができた。先述の4つの質問項目に対して、K地区で暮らしている方と仮設住宅で暮らしている方では、住まいや生活環境の違いはあるが、「地区に対する願いや思い」と「気持ちの支えとなっていること」の内容に共通点を見出すことができた。それらを児童自身が「考察」として記述し、新たな課題設定を行なうことにつなげた。以下は児童の記述である。

○K地区に暮らしている人たちは、災害後、お店がなくなったことにとっても不便を感じている。そして、お店や病院が再開されることを願っている。

○仮設住宅に暮らしている人たちからは、K地区がより安全で安心して暮らせる地域になることを願う声が多かった。

○K地区に暮らしている人たちも、仮設住宅に暮らしている人たちも、「楽しみは、人と会うこと」や「子供の成長を見ること」が共通点で、それがみんなの願いや希望だと分かった。

以上の結果に対して、児童からは「聞き取り内容の集計結果を（地域の方に）報告したい。」

「自分たちに出来ることは何か、具体的に考えていきたい。」という発言が出された。

### ② 新たな課題の発見

整理・分析結果をもとに地域における次の課題を発見した。「災害碑に書かれていること」「秋祭りの稽古の手伝い」「駅の掃除や花だんの草取り」等の出された案を「人を助ける」「災害を語り継ぐ」「文化を受け継ぐ」の3観点で分類した。(図1)

## (3) 自分たちにできそうな企画の立案

発見した課題を踏まえて、K地区を笑顔にするために児童自身が自分たちにできることを考えた。「災害を語り継ぐ」, 「人を助ける」, 「文化を受け継ぐ」の視点をもとに仮設住宅でイベントを開くこと、被災された方々の話し相手になること、受け継ぐ人が少なくなっている秋祭りを継続させるために良さを発信するなど、自分たちにできそうなことについて深めていった。

## (4) 企画に対する地域の人々との意見交流、企画の修正

地域の方々をゲストティーチャーとして招待し、自分たちがK地区のために考えたことを提案した。ゲストティーチャーから、児童の考えに対して、次のような意見が出された。

- ・子ども達がK地区の将来のために色々考えてくれているのは、うれしいし、頼もしく感じる。
- ・K地区の未来は任せた。
- ・文化の伝承など、たくさん考えてくれているのは、うれしいけどまずは小学生のみんなにできそうなことを考えてみてほしい。

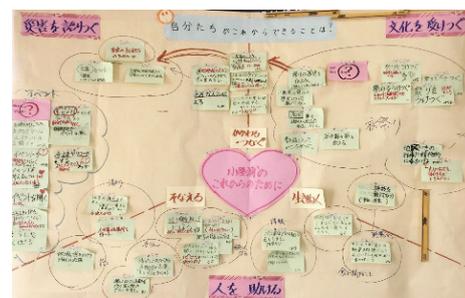


図1 自分たちができることについての分類・整理

- ・将来ではなく今できることをしてほしい。
- ・小学生だからこそ、できることがあるのではないか。

#### (5) 自分たちで考えたイベントの企画の実施

児童たちは「まずは、地域の人々に元気になってもらうことが最も大切である。」として、仮設住宅に出向いて行うイベントを企画した。イベント名は「GO！5！Smile サロン」と名付けられた。しかし、プログラムの計画段階でイベントの目的や参加者への配慮を意識できなくなる等の状況が生じた。教師は学習のプロセスや仮設住宅でのイベントの目的と意義を児童に想起させる場を設定した。児童からは「K 地区を思い出して元気になってほしい。」に加えて「地区に帰りたい」と思ってほしい。「K 地区は私たちがいるから安心してほしい。」などの発言が出てきた。

イベントは 2019（令和元）年 12 月 19 日に実施し、仮設住宅集会所を訪れた。イベントには仮設住宅に入居されている 15 名の方々が参加された。

表1 児童が企画したプログラム

<p>【GO！5！Smile Salon】プログラム</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. リコーダー演奏～優しいあの子～</li> <li>2. はじめの言葉</li> <li>3. いままで取り組んできたこと</li> <li>4. お話～みなさんの思いを聞かせてください～</li> <li>5. 手話ソング</li> <li>6. おわりの言葉</li> <li>7. 感想（アンケート）</li> </ol>
--

児童が準備したプログラムを表1に示す。プログラム3では、学習をもとに被災後の地域の課題や復興に向けて今の自分たちでもできそうなことなどの提案と現在取り組んでいる秋祭りの様子も具体的に説明を行った。その後、児童は3つのキーワード「文化を語り継ぐ」、「人を助ける」、「文化を受け継ぐ」を踏まえて「地区の未来、そして町の未来は任せてください」と宣言した。

プログラム4では、他者と話すことが苦手な児童も積極的に話しかけ、メモをとり、質問に答え、自分たちの日々の様子を話すなど参加者と対話を続けた。以下は参加された方々の感想である。

- ・よく調べている。自分達よりも復興について考えてくれていて、うれしい。
- ・普段の生活のなかでは、笑顔で振る舞っているけど、心の中は悲しい。でも今日はその悲しさを忘れられて笑顔になれた。
- ・仮設住宅の生活でも、友達ができてうれしい。
- ・K 地区のことが気になるから K 地区の様子について教えてほしい。
- ・秋祭りが無くならなかったのはうれしかった。
- ・今日この会に参加できて、生きていてよかったと思う。

プログラム7ではイベントに対するアンケートや口頭による感想を参加者の方々をお願いした。

〈児童が集計した参加者のアンケートや感想〉

- ・優しい気持ちを忘れず、災害について未来へ伝えていってください。
- ・このような活動をどうか続けていってください。
- ・次からはダンスや遊びなどの一緒に行う活動を多く取り入れてください。
- ・もっと学校の行事のことなどを教えてください。
- ・声がよく聞こえなかったので、もう少し大きな声で話してくれると嬉しいです。
- ・何か話をしてあげたかったけど、うまく話すことができませんでした。

〈単元終了後の児童の記述〉

「この子達になら、K 地区の未来はまかせられると思います。」今年の運動会の閉会式で、PTA 会長さんは、私たちにこう語ってくださいました。（中略）しかし、子供の私たちに、「K 地区をまかせる」と言われたその意味が、正直、その時はあまりよくわかりませんでした。

「子供の私たちに、いったい何ができるのだろう。」

私は、K 地区の人たちが今どんな思いをもっているのかを、もっと知らないといけないと思いま

した。そこで、5年生の仲間と話し合い、総合的な学習の時間を中心に、地域の方にインタビューをしたり、新聞記事を集めたりして、豪雨災害の記録や復興への取組の様子を知っていきました。(中略) そうする中で、地域の人たちは、復旧作業の合間に、買い物や野菜作りなどを通して、お互いに思いを語り合い、楽しみを見つけながら、復興に向かって頑張っているのだということを知りました。(中略) 仮設住宅に暮らしておられる方を訪ね、学習発表会の案内を届けました。すると、出会った方たちから、「K地区をたのんだよ。」と、何度も言われました。私は、この気持ちをちゃんと受け止めたいと思いました。

その頃、K地区では秋祭りの練習が始まりました。本当は、巫女舞をするのは気が進まなかったのですが、私は友達と一緒に引き受けることにしました。(中略) 巫女舞をやり終えた時、私は、「この復興1年目の小屋浦の秋祭りで、巫女舞ができてよかった。」と、心から思えました。一生懸命に練習して、きれいに舞えるようになったことで、私は、K地区の伝統を引き継いでいることに、誇りがもてるようになりました。今では、後に続く子供たちに教えたいと強く思っています。

12月になり、私たちは、「Go！5！スマイルサロン」を企画し、再び仮設住宅のみなさんを訪ね、お話を伺いました。20名もの方々が集まってくださり、災害当時の様子や思いを話してくださいました。そして、一緒に手話で「ふるさと」を歌いました。帰るときに、「会いに来てくれてありがとう。また、K地区の様子を話しに来てね。」とあく手をしてくださいました。役に立てたと感じて、とても嬉しかったです。

私は、約9ヶ月の取組の中で、地域の復興のために、子供にも出来ること、子供だからする意味があることに気付きました。それは、私たちが元気で頑張っていることが、地域を元気にするという事です。その為に、私はこれからもたくさんの方に声をかけ、地域の方達とつながっていきたく思います。だから、今、私は大きな声で言いたいです。「地区の未来は、私たちにまかせてください。」

### Ⅲ-5-2 質問紙による調査及び個別の聞き取りの結果

単元実施前(2019年5月)及び単元終了時(2019年12月)に対象学級の児童に質問紙による調査を実施した(表2)。調査項目は「総合的な学習の時間に関すること(9項目)」と「本単元の復興共育に関すること(5項目)」の14項目を4件法(4よくあてはまる、3ややあてはまる、2あまりあてはまらない、1まったくあてはまらない)を用いて実施した<sup>5</sup>。

単元開始前(2019年5月)における総合的な学習の時間の学習のプロセスに関する項目について肯定的な回答を見ていくと「アンケートやインタビューなど情報収集の方法がわかります。」33.3%、「集めた情報を整理したり分析したりする方法がわかります。」22.2%、「集めた情報をもとにして、次に取り組む新しい課題を見つけることができます。」55.5%であった。また「課題を解決していくために解決

表2 児童アンケートの内容及び集計結果一覧表

5年 総合的な学習の時間 アンケート	令和元年 月 日		集計結果(n=9)							
	事前: 令和元年9月				事後: 令和元年12月				(人)	
4よくあてはまる 3ややあてはまる 2あまりあてはまらない 1まったくあてはまらない	4	3	2	1	4	3	2	1		
1 総合的な学習の時間の学習は好きです。	5	4	0	0	7	2	0	0		
2 アンケートやインタビューなど情報収集の方法がわかります。	0	3	6	0	6	3	0	0		
3 集めた情報を整理したり分析したりする方法がわかります。	1	1	7	0	9	0	0	0		
4 集めた情報を元にして、次に取り組む新しい課題を見つけることができます。	2	3	4	0	5	4	0	0		
5 課題を解決していくために、解決方法や手順を考え、計画を立て、見通しをもつことができます。	1	7	1	0	5	3	1	0		
6 相手の立場と考えを理解しようと、積極的に働きかけることができます。	5	4	0	0	5	4	0	0		
7 友だちと協働(話し合ったり、助け合ったり)して課題解決に取り組んでいます。	5	3	1	0	8	1	0	0		
8 今後の学習や生活に生かせるよう、学習の仕方や進め方を振り返ることができます。	3	4	2	0	7	1	1	0		
9 地域に続いていくよさを大切にして、地域の一員として、活動に参画しています。	7	1	1	0	7	2	0	0		
1 災害後の小屋浦の方たちのくらしの様子について知っています。	3	3	3	0	6	2	1	0		
2 小屋浦を守るために、いろいろな立場や考え(気持ち)があり、互いに支え合っていることがわかります。	5	3	1	0	8	1	0	0		
3 小屋浦の復興・発展のために、自分たちが取り組みたいことを考えることができます。	3	2	4	0	7	2	0	0		
4 小屋浦の未来のために自分たちができることを、友達と協働して取り組むことができます。	5	2	2	0	8	1	0	0		
5 小屋浦の文化伝承・災害伝承・地域への貢献などを意識することができます。	4	1	4	0	7	2	0	0		

<sup>5</sup> 質問紙及び個別の聞き取り調査の実施と資料作成にあたっては、広島市立古市小学校教諭 中川憲悟氏にご協力頂いた。

方法や手順を考え、計画を立て、見通しをもつことができます。」では9名中8名の児童が肯定的な回答をしているが、そのうち「よくあてはまる」は1名であった。単元終了時（2019年12月）の調査結果としては、学習のプロセスに関する項目については9名全員が肯定的な回答となった。また「課題を解決していくために解決方法や手順を考え、計画を立て、見通しをもつことができます。」の項目では9名中8名の児童が肯定的な回答をしているが、そのうち「よくあてはまる」は5名となった。

単元前後の回答結果の変化が大きい児童に個別の聞き取り調査を実施した結果を次に示す。

- ・アンケートの方法や整理・分析の仕方を学び、学んだことを地域の方々との交流の中で繰り返す行うことによって、自分だけでもできるように思った。
- ・活動を通して、情報収集や活用の仕方が分かり、他の教科やイベントの場において活かすことができたため。
- ・最初は、先生から教えてもらいながらまとめていたが、現在では、学んだことを活用して、自分なりに意見をまとめることができるようになったと感じるため。
- ・情報収集→まとめ・分析→改善→実践のサイクルができ、新しい課題を発見することができたり、これから行うべき活動を考えたりできるようになった。
- ・理科の学習の場において、表へのまとめ方など総合的な学習の時間で学んだことが使えそうだと思うため。

「復興共育に関すること5項目」において、単元開始前の肯定的な回答は「K地区の復興・発展のために、自分たちが取り組みたいことを考えることができます。」55.5%（よくあてはまる3名、ややあてはまる2名 計5名）、「K地区の文化遺産・災害遺産・地域への貢献などを意識することができます。」55.5%（よくあてはまる4名、ややあてはまる1名 計5名）であった。単元終了時は、同項目について9名全員が肯定的な回答となった。変化が大きかった児童に対する個別の聞き取り調査結果は次の通りである。

- ・はじめは、復興・発展と聞いて地区のために何をしたらいいのか、自分たちに何ができるのかがまったく分からなかった。しかし、調べ学習や地域の方々との交流を通して、自分たちに何が求められているのかを知り、地区のために取り組みたいことについて考えることができるようになった。
- ・災害直後から漠然と何か地区のためにやりたいと思っていたが、クラスのみならず活動するにつれてやりたいことが明確になった。
- ・アンケートや交流をするにつれて地区が好きという気持ちが高まっていった。さらに、家庭・地域、仮設住宅の人々に「地区を任せよう。」と言われて、文化遺産・災害遺産・地域への貢献などの意識を持つようになり、次第に意識が高くなっていった。

#### IV 考察

実施結果から次の3点を把握することができた。

##### (1) 学習のプロセスを通じた学習の深まり

###### ① 情報収集による多様な人々の願いや地区への想いの共通点や相違点への気付き

情報収集の中で、スーパーマーケットがなくなり、高齢者の方々は不便で困っているのと予想していた児童は調査後、「災害により、スーパーがなくなり不便ではあるが、移動スーパーは、食料品を買うためだけでなく、そこに集う地域住民の交流の場であり、元気であるかどうかを確認する場にもなっている。つまり人々の心のよりどころのひとつになっている」と記述している。

また、児童が考えた企画について、地域の方々からは「まず、小学生のみんなにできそうなこと

を考えてみてほしい。」「将来ではなく今できることをしてほしい。」「小学生だからこそ、できることがあるのではないか。」という予想外の意見であった。児童は自分たちの思いとは異なる地域の人々の願いに出会い、「まずは、地域の人々に元気になってもらう」ことが必要であることに気づき、仮設住宅に出向いて行うイベントの企画へと向かう。このように、同じ被災地域に住んでいても立場により人々の思いや願いが異なることに児童が気付くことができたと考えられる。

## ② 課題解決に向かう学習のプロセスの良さの実感

本研究では総合的な学習の時間の一単元として実施した。この授業の学習のプロセスについて、単元終了時には9名全員が肯定的な回答となった。また、「課題を解決していくために解決方法や手順を考え、計画を立て、見通しをもつ」の項目では「よくあてはまる」が1名から5名へととなった。聞き取り調査においても（アンケートの方法や整理・分析の仕方を）「繰り返し行うことによって、自分だけでもできるように思った。」「現在では、学んだことを活用して、自分なりに意見をまとめることができるようになったと感じる」と実感している。また、「情報収集や活用の仕方が分かり、他の教科やイベントの場において活かすことができた」「情報収集→まとめ・分析→改善→実践のサイクルができ、新しい課題を発見することができたり、これから行うべき活動を考えたりできるようになった」と、学習のプロセスの良さが分かり、他の場面ですでに活用していることも分かる。さらに「総合的な学習の時間で学んだことが（他教科にも）使えそうだと思う」という教科の学習と総合的な学習の時間との双方向での関連・発展を意識した記述も見られた。

## (2) 被災地域の人々との協働的な活動による復興に対する児童の意識の変容

### ① 地域に対する愛着の高まり

振り返りの記述において、「気が進まなかった」舞を終えた時、「伝統を引き継いでいることに、誇りがもてるようになり」「後に続く子供たちに教えたい」という地域の伝統文化に対する意識の変化を示している。また、企画の準備段階で「K地区を思い出して元気になってほしい。」という願いに加えて、「地区に帰りたいと思ってほしい。」「地区に私たちがいるから安心してほしい。」という発言が見られる。仮設住宅の人々と地区への愛着を共有したいという願いに発展している。

単元終了時には、「地区が好きという気持ちが高まっていった。さらに、家庭・地域、仮設住宅の人々に『K地区を任せよう。』と言われて、文化伝承・災害伝承・地域への貢献などの意識を持つようになり、次第に意識が高くなっていった」と地域に対する愛着や貢献の高まりを実感している。

### ② 自己有用感の自覚と復興における自分の役割に対する意識の高まり

単元終了後の聞き取りでは、「災害直後から漠然と何かK地区のために行いたいと思っていたが、クラスのみんと活動するにつれてやりたいことが明確になった。」「はじめは、復興・発展と聞いて、K地区のために何をしたらいいのか、自分たちに何ができるのかがまったく分からなかった。しかし、調べ学習や地域の方々との交流を通して、自分たちに何が求められているのかを知り、K地区のために取り組みたいことについて考えることができるようになった。」と単元の活動を通して自分の役割が明確になってきた実感をもっている。

単元の展開でその変化を見ていくと、情報収集後の「私たちがK小学校の畑を作ることで、畑を失った方たちに、笑顔が戻ってくることになるのでは」という自分たちの学校生活の中にも被災された人々の願いにつながる活動があることに目を向け始めた発言が見られる。また、「地域の方たちが、自分たちに災害時のことを一生懸命に語ってくれるということは、自分たちは話を聞く役割があるのではないか。」と地域の人々の様子の観察を通して、自分たちの役割を見つけている。

単元終了後の児童の記述では、(イベントの企画に)「帰るときに、『会いに来てくれてありがとう。また、K地区の様子を話しに来てね。』とあく手をしてくれました。役に立てたと感じて、とて

も嬉しかったです。」と自己有用感を実感している。さらに「約九ヶ月の取組の中で、地域の復興のために、子供にも出来ること、子供だからする意味があること」「私たちが元気で頑張っていることが、地域を元気にする」「これからもたくさんの方に声をかけ、地域の方達とつながっていきたい」と自分の役割への気付きが示されている。地域の方々との協働的な活動や体験を通して、子どもとしての役割や日常生活の中で果たすことができる役割への気付きにつながったと考えられる。

### (3) 被災地域の人々の復興への参画意識の高まり

本單元では、地域の高齢者の方々、仮設住宅で生活されている方、児童の企画の助言のゲストティーチャー等地域の方々との関わりを設定した。本単元のねらいについては説明し、協力を依頼したが、可能な限り、地域の方々の実際の思いや願いに児童が触れることを重視した。

児童が考えた企画について、ゲストティーチャーからは、肯定的な言葉も多く出されたが「将来ではなく今できることをしてほしい。」「小学生だからこそ、できることがあるのではないか。」など、実現の可能性や具体性についての指摘がなされている。児童が実施したイベント後の参加者からの感想には、感謝の言葉とともに「次からはダンスや遊びなどの一緒に行く活動を多く取り入れてください。」「もっと学校の行事のことなどに教えてください。」「もう少し大きな声で話してくれると嬉しいです。」など次の企画に対する要望や「何か話をしてあげたかったけど、うまく話すことができませんでした。」という自分自身の振り返りも見られる。情報収集の段階では、児童が訪問しただけで大変喜んで下さり、温かく歓迎していただいた。しかし、單元の中で児童が繰り返し地域の方々との関わり、活動する中で、児童の活動が地域に貢献し、より良いものとなるように、地域の方々も参画意識が高まり、具体的な意見や要望が多く出されるようになったと考えられる。

## V 本研究のまとめ

### V-1 本研究の成果

単元の実施結果から次の点が明らかとなった。

#### (1) 切実な課題解決に向かう学習プロセスによる学びの深まり

本研究では、災害後教育として教師が無理なく実施できるよう、対象学年の教科等との関連を計りながら、総合的な学習の時間の基本的なプロセスに基づいて単元を開発した。実施結果をみると、児童は総合的な学習の時間の課題解決に向かうプロセスの各段階の方法の習得を実感し、学習のプロセスの良さの気付きが見られる。災害後の復興教育という児童にとって切実な課題の解決に向かうための見通しと振り返りの中で主体的な学びが可能となった。災害後の復興教育であるからこそ教科等の単元の中で、課題解決のプロセスを丁寧に実施していくことで、児童自身が他の課題解決においても活用できる汎用的な知識・技能の習得を実感できると考える。

#### (2) 被災地域の人々とのゆるやかな協働による授業づくりの可能性

本研究は対象校における復興教育の全体計画に基づいて実施したものであるが、積み重ねもなく、特に被災地域の方々の思いについては、被災者ではない教員が把握することは難しかった。そのため、単元展開の過程で児童や地域の実態に基づいて修正を加えながら実施した部分も多い。また、児童が繰り返し地域との関わりを続ける中で、本單元に対する被災地域の方々の理解や参加意識も見られるようになった。このことは児童の自己有用感や復興への役割への意識の高まりにつながっている。災害後の復興教育においては、平常時のように年度当初のカリキュラム作成時に家庭や地域の方々の参画は難しい。本実施単元のように授業づくりの中で児童と教職員が被災地域の人々との関わりを深めながらゆるやかな協働を進めることが無理なく実施でき、効果的であると考えられる。

## V-2 今後の課題

本研究は災害後の復興教育として一単元を開発し、その結果を考察した段階である。そのため、次の点が課題として残っている。

### (1) 児童自身も被災者であるという視点に基づいた災害後教育

本単元においては、郷土愛を深めることや地域の将来の担い手という意識の向上が目的となっている。しかし、企画の計画段階で、児童達が自分たちの「お楽しみ会」的なものに向かう状況が生じ、教師がイベントの目的と意義を想起させる場の設定をしている。児童もそれを受け入れ、結果的にはより高い目標をもってイベントの準備に向かっている。本研究の実施単元では、児童が地域の被災者に向けての働き掛けを行ったが、児童自身も被災者である。児童の反応や単元終了後の記述からは「自分自身が元気になった」「楽しかった」等は把握できなかった。対象児童が小学生であることを考慮すると災害後1～2年目に実施する単元においては、被災者である児童自身の立場を意識した授業の開発も必要であると考えられる。

### (2) 高度なテーマに対する指導・支援計画の必要性

単元実施結果では、イベントのプログラムの計画段階で、児童達が実施の目的や参加者への配慮を意識できなくなる等の状況が生じている。児童は特別活動での集会活動の企画・運営は経験しているが、被災した人々を対象とした取り組みは未経験であり、イメージすることは難しい。教師はこれまでの学習のプロセスや仮設住宅でのイベントの目的と意義を児童に想起させる場を途中段階においても設定する必要性が生じている。「復興」というテーマに取り組むためには、各プロセスにおいて児童の実態や状況を踏まえた指導・支援計画の検討が必要である。

### (3) 全体計画とのつながりと災害後教育の今後の展望

本研究では一単元の児童の反応や調査結果を分析・考察したものがあるが、対象校の「復興共有全体計画」における教育的価値のどの項目にあてはまるのかが明確ではない。また、モデル単元として開発したため、他学年とのつながりや明確な評価ができてない。対象校の復興教育は2020（令和2）年度も継続しているが、実施期間が設定されていないため、来年度以降の取り組みについて検討中である。例えば復興教育から、地域の未来にむけた教育への拡大も考えられる。災害後教育の今後の展望については、学校・家庭・地域の実態や願いもふまえて検討していく必要がある。

## おわりに

本研究の対象校では災害直後は地域の復興が優先課題であり、当初は復興教育という視点を持つことが難しい状況であった。新たに復興教育の計画を立案する余裕のない時期にその手掛かりとなったのは東日本大震災の被災地域における復興教育の実践とその記録である。どの災害も被災状況や地域の実態も異なっているが、災害後に実施された教育の記録の蓄積は、今後の災害後教育にとって資料の一つとなると考える。対象校の「復興教育」教育計画は修正され、現在もその取り組みは続いている。今後も継続して調査し、災害後教育の実施上の成果と課題を明らかにしていきたい。

## 謝辞

本研究の調査等に際しては、広島県安芸郡坂町立小屋浦小学校校長中下正美氏を初めとする現教職員の方々、児童の皆さん、保護者の皆様、地域の皆様にご協力頂きました。また、2018（平成30）年度及び2019（平成31）年度当時の校長吉岡哲哉氏、並びに旧職員の方々には貴重な取り組みを資料としてご提供頂きました。ここに記し、深謝申し上げます。